

アニメで知る心の世界

こもれば心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：シン エヴァンゲリオン 劇場版

その 12

今回のテーマ

シンジのエディプスコンプレックスそして父との対峙

前回のおさらい

エヴァンゲリオン Q においては、シンジが綾波をはじめ、これまで経験してきた相次ぐ喪失を受け入れられず、もがき苦しむ中、より事態を悪化させてしま

う。

シンジはその事態に直面し、強い絶望、取り返しのつかない様な罪悪感の中で身動きが取れず、なにか、もぬけの殻のような状態になってしまう。そんな絶望に打ちのめされていたシンジは、第三村で温かい人間関係を築くことで、少しずつ立ち直り始める。トウジやケンスケ、そして人間らしい心を取り戻しつつあ

た綾波との交流を通じて、シンジは自分自身を取り戻し、周囲の人々と積極的に関わっていく。

しかし、綾波の死という大きな悲劇がシンジを襲う。この出来事は、シンジにとって大きな衝撃であり、同時に、第三村という温かい環境から離れ、父親であるゲンドウと対峙するという、新たな人生の章を始めるための転機でもある。綾波の死は、シンジが心理的に自立し、大人へと成長していくための、いわば**分離・個体化**を象徴する出来事とも言える。

そして今回は前回に引き続き、心的に成長したシンジが父と対峙（エディプスコンプレックス）していく様を考えていく。

喪失という観点でポウルビイの悲哀の心理過程を説明した。

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ポウルビイ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

6. シンジとヴンダーとの葛藤

綾波の死後、再びヴンダーに乗り込んだシンジであったが、まもなく、ヴンダーはネルフ本部に対し、ヤマト作戦を行い、総攻撃をしかける。しかしその作戦は失敗し、アスカも亡くなってしまう。ゲンドウがヴンダーの前に訪れ、ヴンダーの主機であった初号機を奪い、さらに深層の「マイナス宇宙」へと向かってゆく。

そしてシンジは紆余曲折を経て、エヴァに再び乗り、ゲンドウを追うためにマイナス宇宙へと突入し、その世界でゲンドウと対峙する。

このとき、ミサトやリツコがゲンドウに対峙したシーンで告げた言葉（リツコ「私たちは、神に屈した補完計画による絶望のリセットではなく、希望のコンティニューを選びます」、ミサト「私は、神の力をも克服する人間の知恵と意志を信じます」）は、喪失の痛みを乗り越え、**悲哀の過程の最終段階である**

④**離脱・再建の段階**へと進もうとする決意を表しているように思われる。彼女たちは、心的に成熟し、神に委ねるのではなく、**自らの力で未来を切り開く**ことを選択し、希望に満ちた未来を築こうとしている。この発言を後にアディショナルインパクトを起こした時に冬月が語っていた「希望」と対比すると興味深い。リツコやミサトが語っていた希望、それこそが真の希望なのである。

NERV と ヴンダーの違い

項目	NERV	ヴンダー
目的	人類補完計画の実現	人類補完計画の阻止
性質	秘密主義、軍事組織	反 NERV 組織、機動性重視
リーダー	碓ゲンドウ	ミサト・カツラギ
価値観	個の消滅、全体主義	個の尊重、多様性

7. シンジと父との対峙 父殺し

マイナス宇宙の中でシンジはエヴァを通して対峙する。その中で二人はぶつかり合いながらも交流をしていく。

2) 父と対峙しぶつかるシンジ

シンジは、追憶の世界でゲンドウとの対決を繰り返すが、全く敵わない。エデ

イブス葛藤を乗り越えようと、父を倒そうとするシンジに対し、ゲンドウは「暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではない」と告げる。この言葉は、シンジの行動が的外れであることを示唆している。大切なのは、父を倒すことではなく、対等な関係を築くこと。つまり、お互いを深く理解し、認め合い、社会の一員として生きることである。

シンジは、この経験を通して、対象（ここではゲンドウ）を知り、現実を受け入れることの重要性を悟ります。それは、単に父を倒すことではなく、社会の一員として生きていくために必要な、心の成長を意味する。「うん。父さんと話したい」という言葉は、シンジがそのことに気づき、新たな一步を踏み出そうとしていることを示している。

W.ビオンは人の出会いは認知からではなく、情緒的体験から始まるという。

シンジの「父さんと話したい」という言葉には、単なる会話の意図だけでなく、より深い意味合いが込められているように思われる。彼は今後、ゲンドウに対して「父さんは、ここで何がしたいの？」「父さんは何を望むの？」「父さんのことが知りたいから。」といったシンプルな質問を投げかけることで、父親の真

意を深く理解しようとしている。

しかし、ここでの「知る」という言葉は、単に情報を得たいという軽い気持ちではなく、シンジの強い覚悟を示す言葉であるように感じられる。シンジは、父親との対話を通じて、これまで知らなかった衝撃的な事実、例えば「父ゲンドウが母のユイやゲンドウ自身に夢中でシンジには関心がなかった」といった真相に直面する可能性も孕んでいる。

このような強い覚悟を持って、シンジは父親との関係を深く掘り下げ、自らの存在意義や父親の本当の姿を明らかにしようとしているのではないだろうか。

3) 父との対話 アディショナルインパクトを起こしたゲンドウ

シンジの「父さんは、ここで何がしたいの?」という問いかけに対し、ゲンドウはアディショナルインパクトを起こした理由を「虚構と現実を溶け合わせる」ことだと説明します。冬月も同様に、「希望という病」に囚われていると語り、二人の共通点として、妻ユイの喪失を受け入れられないという点が浮かび上がる。これは、J.ボウルビイのいう悲哀の心理過程における「②思慕と探求・怒り

と否認の段階」に該当し、躁的防衛の一種と言える。アディショナルインパクトを通じてユイを生き返らせようとするゲンドウの行動は、シンジがニアサードインパクトで綾波を救い出そうとした行動と類似している。

けれども、ニアサードインパクトという重大な過ちを犯したシンジは、絶望と苦悩の中で成長し、様々な喪失を受け入れることで精神的な成熟を遂げる。父親との対峙を通してエディプスコンプレックスに向き合い始めるシンジの姿は、喪失を受け入れないゲンドウの心に変化をもたらし始めるきっかけとなります。

ゲンドウとシンジは、それぞれが対象喪失の悲しみを抱え、未解決な哀悼反応を示している。この親子間の未解決な課題は、世代間伝達によって繰り返されてきた。しかし、心的に成熟したシンジが、父親を知ろうとするなかで、父の対人関係が再構築されていき、この負のサイクルを断ち切り、健全な親子関係へと転換しようとしている。

3) 父との対話 アディショナルインパクト後

シンジ「父さんは何を望むの？」

ゲンドウ「お前が選ばなかったA・T・フィールドの存在しない、全てが等しく
単一な人類の心の世界。他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も
悲しみもない、浄化された魂だけの世界。そして、ユイと私が再び会える安らぎ
の世界だ」

シンジ「父さん、もうやめようよ」

ゲンドウ「なぜだ？ なぜシンジがここにいる？」

シンジ「父さんのことが知りたいから。寂しくても、いつも父さんに近づかない
ようにしていた。嫌われているのが、はっきりするのが怖かったんだ。でも、今
は知りたい。父さんのことを」

ゲンドウ「A・T・フィールド？ 人を捨てた、この私に？」

ゲンドウ「まさか、シンジを恐れているのか、この私が」

シンジは、携帯音楽プレイヤーを彼に差し出す。

シンジ「これは捨てるんじゃなくて、渡すものだったんだね。父さんに」

シンジ「僕と同じだったんだ。父さんも」

ゲンドウ「ああ、そうだ。ヘッドフォンが外界と私を断ち切ってくれる。無関心を装い、他人のノイズから私を守ってくれた。だが、ユイと出会い、私には必要がなくなった」

ゲンドウは、その後ゆっくりと内面を語り始める。

【考察】

父がアディショナルインパクトを起こそうとした真意は、自身が神となり、A・T・フィールドの存在しない、全てが等しく単一な人類の心の世界、他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も悲しみもない、浄化された魂だけの世界と創造しようとしていることである。

一見、その世界は非常に理想的な世界のように聞こえるが、妻ユイの喪失を受け入れられない、J.ボウルビイのいう悲哀の心理過程における「②思慕と探求・怒りと否認の段階」に該当し、躁的防衛にすぎない。

シンジは躁的心性で起こすことになったニアサードインパクトによって、周りの人々は苦しめてしまったことを深く知っている。だからこそ「父さん、もうやめようよ。」と説いている。そして成熟したシンジはより父を深く知ろうとする。そこで父は A-T フィールドを発動するが、ゲンドウがシンジと情緒的に関わることを怯えていることが明らかになる。そしてシンジが「僕と同じだったんだ。父さんも」という。それは父と子の情緒が共有されていく瞬間のよう感じられる。その情緒に触発されるなかで父の過去が語られていく。

4) 父の内的世界 人類補完計画とは？

→人類補完計画とは分離を否認した肛門期の固着の世界である。

シンジとゲンドウの対話から、ゲンドウの過去が明かされる。幼少期から孤独を好み、人と深く関わるができなかったゲンドウは、ユイとの出会いで初めて心の安らぎを知る。ユイは、ゲンドウにとって母親のような存在であり、彼の内的なる世界に温もりと彩りを与えた。しかし、ユイの突然の死は、ゲンドウに深い悲しみをもたらし、彼はその喪失感を乗り越えられずに人類補完計画という壮

大なプロジェクトへと突き進んでいく。

→人類補完計画とは分離を否認した肛門期の固着の世界である。

しかしゲンドウは現実に直面し、苦悩する。

ゲンドウ「私は私の弱さゆえに、ユイに会えないのか。シンジ」

幼少のシンジ「その弱さを認めないからだと思うよ」

シンジ「ずっと分かっていたんだろう？ 父さん」

こうして続けてきたシンジとゲンドウの対話を経て、世代間伝達に楔をうつものになっている。まさにこれまでのことに落とし前のつける言葉であり、そこからミサトからガイウスの槍が届けられ、父の贖罪が始まる

5) 父の贖罪

自身の死と引き換えにミサトが渡したガイウスの槍をシンジが受け取る。そ

れを見たゲンドウはそこにシンジの成長を見出しつぶやく。

ゲンドウ「他人の死と想いを受け取れるとは、大人になったな、シンジ」

そして過去のシンジをゲンドウが回想する。

「ユイを再構成するためのマテリアルとして、シンジが必要か否なのか、最後まで分からなかった。願いを叶えるには、報いが伴う。子供は私への罰だと感じていた。子供に会わない、関わらないことが、私の贖罪だと思い込んでいた。その方が子供のためにもなるとも信じていた」

ゲンドウは自分のやってきた行為を辿る。陰鬱な表情を見せるシンジ。父親の背中を見て泣きじゃくる幼い時のシンジ。駅の改札を通り、親類の元へ引き渡そうとしたシンジを、跪いて抱き寄せる。

ゲンドウ「すまなかった、シンジ」

そしてゲンドウがシンジを今のシンジ見たときつぶやく

ゲンドウ「そうか、そこにいたのか——ユイ」

【考察】

ゲンドウが他人を思い遣る成熟したシンジの姿をみて、自分がこれまで抱いてきたシンジと異なる存在なのだということに気が付くシーンである。ゲンドウはこれまでシンジを一人の人間ではなく、ユイに付随する存在としてしか捉えていなかったが、今、目の前にいるシンジはそういう存在ではない一人の成熟した人間なのだということに気がつき、ゲンドウ自身がユイの喪失を受け入れられず、未熟であるが故にシンジの気持ちを受け入れられなかった（シンジ（他人）の気持ちを思い遣ることができなかった）ことに自責の念を感じ、シンジに謝罪する。

それは父とシンジが深く交流し、ゲンドウ自身がこれまでの過去をふりかえり、喪失を受け入れられない自身に気づく一方で、シンジが成熟した存在になったことに気がついている。これはゲンドウの心性が妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行していると考えられる。その中でシンジという存在が自分とそしてユイと血の繋がった存在であることにゲンドウは気がつき、シンジの中にユイの存在を見出したのではないだろうか？

→そこで、シンジの父への思いは整理されたからか、父はトボトボと電車から降りていく。

一方で、電車は、ある種シンジが今後進むべき将来を象徴している様に感じられる。シンジは、父に受け入れられたい思いがある一方で、今まで圧倒的に強大な父親像に押しつぶされそうになっていたと考えられる。しかし父と深く交流する中で、シンジは父が自分と同じことを悩み苦悩する、愛おしい一人の人間なんだと気づいた。父親が電車から降りたということは、もうシンジにとって強大な自身を圧倒する様な父親ではないと感じられる様になったことを意味している様に感じられる。そしてそれこそが、シンジの心の中での父親殺しになったと考えられる。

8. アスカ、カヲル、綾波の魂の浄化

カヲル「碇ゲンドウ、彼が今回の補完の中心、円環の元だ。ここからは僕が引き継ぐよ、碇シンジ君。君は何を望むんだい？」

シンジ「僕はいいんだ。辛くても大丈夫だと思う。僕よりも、アスカやみんなを助けたい」

カヲル「そうだった、君はイマジナリーではなくリアリティーの中で、既に立ち

直っていたんだね」

父との深い交流を経て、エディプス葛藤を乗り越え、心的にシンジは成熟したと考えられる。シンジは、その後、亡くなってしまったアスカ、カヲル、綾波の魂の救済の作業に乗り出そうとする。

それはシンジ自身にとって、父と同じ様に彼ら彼女らと深く情緒的に関わる中で、喪の作業を成し遂げていくことである様にかんじられる。

1) アスカの場合

アスカの過去が語られる。アスカはいつも周囲に対して強がっていたが、実際はシンジと同じ様に孤独な世界で、もがき苦しみ、誰かと深い交流を望んでいたか弱い少女であったことが明らかになっていく。

アスカ「パパは分からない。ママもいない。だから、誰も要らないのよ、アスカ」

アスカ「誰もいなくていいようにする。そうしないと辛いから。生きているのが
苦しいから」

アスカ「エヴァに乗る」

歯を食いしばって、訓練を積み、実験に耐えるアスカの姿。

アスカ「人に嫌われても、悪口を言われても、エヴァに乗れば関係ない。他に私の価値なんてないもの」

アスカ「誰も必要としない、強い体と心を持つ。だから、私を褒めて！ 私を認めて！ 私に居場所を与えて！」

少女時代のアスカは、見知らぬ家族が幸せそうに笑っている光景を見た。駄々をこねて母親に抱かれたのはシンジだった。若かりし日のゲンドウとユイに守られている。

アスカ「ほんとは寂しい。ほんとはただ、頭を撫でて欲しかっただけなの」

倒木の上で泣きじゃくる少女時代のアスカに、あのパペットと同じ格好をした着ぐるみが近づく。彼女の隣に座った着ぐるみは、幼い体で手袋をはめたまま涙を拭っているアスカの頭を撫でた。

着ぐるみが、おもむろに被り物を外した。それは相田ケンスケだった。

ケンスケ「いいんだ。アスカはアスカだ。それだけで十分さ」

アスカは涙に濡れた瞳を見開いた。

浜辺でアスカは覚醒する。アスカは横たわっていた。

アスカ「私、寝てた？」

アスカは夜空に向かって呟いた。そして傍らに座っているシンジに気づいた。

アスカ「バカシンジ」

シンジ「よかった。また会えて。これだけは伝えておきたかったんだ」

シンジは膝を抱えて、優しい眼差しでアスカを見下ろしていた。落ち着いた声で言う。

シンジ「ありがとう。僕を好きだと言ってくれて。僕も、アスカが好きだったよ」

アスカ「――」

アスカは身をよじって、シンジに背中を向けた。

シンジ「さよならアスカ。ケンスケによろしく」

【考察】

ここでアスカの過去を言及した自身の独白から始まる。その中でアスカは両親がいない天涯孤独な世界で生きてきたことが語られる。「誰もいなくていいよ

うにする。そうしないと辛いから。生きているのが苦しいから」とアスカは語っているが、これはエヴァの序の冒頭部のシンジの心性と同じ様に傷つかない様に自己愛的な殻を作っていた。そして「お前バカァ？」見下されない様にひたすら努力を重ねてきた。けれども本当は孤独で、自分の思いをきちんと受け止めて欲しかったのだと思う。しかしそれができず攻撃的な言葉を発し続けてしまう、まさにヤマアラシのジレンマであった。

エヴァの破でシンジとアスカが同じ布団で寝転んで、交わした言葉の中で、エヴァに乗る意味について語られたとき、シンジが

「父さんに褒めてほしいのかな？今日は、初めて褒めてくれたんだ。初めて褒められるのが嬉しいと思った。父さん、もう僕のこと認めてくれたのかな？ミサトさんの言ってた通りかもしれない」

と話しているが、それはアスカ自身も感じていたことであったと考えられる。深く同じ心情を感じていたからこそアスカはシンジに惹かれていったと考えられる。そして随所でアスカはいつかシンジに助けて欲しいと感じ続けたのだろう。そして成熟したシンジは「ありがとう。僕を好きだと言ってきて。僕も、アスカが好きだったよ」と話す。それはこれまでアスカがシンジに、深く自分の心を

理解してくれる対象に言って欲しかった言葉であったと考えられる。そしてアスカの魂は浄化されたが、それと同時にシンジのアスカの喪失も受け入れたものと考えられる。